東邦看護学会
News Letter 2024

第24回学術集会報告
看護の未来を拓く～看護を継承し未来につなぐ～

今年度の大会長は、急性期病院の看護を担う看護部長の小原雅子さん。いろいろな社会課題をふまえ急性期医療を提供する中で、どのようにして急性期病院での看護の質を上げられるかという研究が11演題。本学会の特徴である研究に発展するような日々の取り組みや活動の報告が20演題ありました。
変えていくべきものと変えてはいけない看護の本質とは？を考えた一日になり、とても充実した学術集会になりました。

特別講演
ケアイノベーションで看護の未来を拓く
石川県立看護大学学長　真田弘美先生

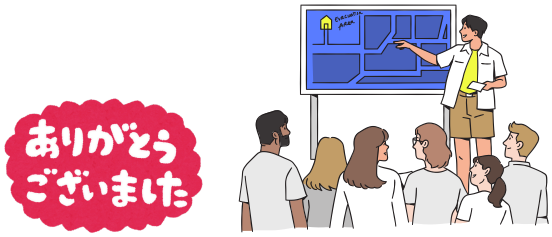
災害時や在宅療養の中で活用できる超音波エコーにＡＩを使用した例や遠隔ケアの実際など、開発・研究され看護に活かしていらっしゃる事例をお聞きしました。今なければ実践者が使えるようなものを開発する。本学会でもそんな研究発表が増えていくような期待が膨らみました。

教育講演
看護の未来を拓く
診療看護師（NP）の看護実践からの提言
国立病院機構長崎医療センター本田和也先生

診療看護師（NP）・特定行為研修修了者の活動をとおして、患者への直接ケアだけでなく同職種への教育がケアへの発展に取り組まれていました。また、離島での活動報告は、地域医療での看護職のあり方を学ぶ機会になり、地域の中で私たちにできることがもっとあるのではないかと考える時間となりました。

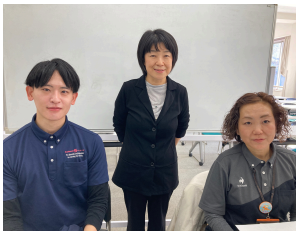
シンポジウム
今、私達がやること－大災害への準備－
世田谷記念病院 村上秀喜先生
金沢医科大学病院 中村真寿美先生
東邦大学医療センター大森病院
後藤真利子先生

東日本大震災から13年。
私たちは多くの災害を経験しました。
シンポジウムでは、災害時病院対応や災害派遣を経験した3名の方々からご講演をいただき、経験の叡智に触れ、未来に備える重要性を学ぶことができました。



教育セミナー
地域の中で生きるを支える－高齢者のアドバンス・ケア・プランニング支援－
大田区地域包括支援センター蒲田東　小池和江先生
ソフィアメディ訪問看護ステーション矢口　山本恭也先生

いつも地域での暮らしを支えていらっしゃる方々です。病院も地域包括ケアシステムの中のひとつ。地域の方々とつながり、健康やアドバンス・ケア・プランニングを支援する体制づくりができていることを改めて実感しました。



https://www.n-gakai.toho-u.ac.jp/index.html　広報委員

学術集会賞に選ばれた方々　おめでとうございます！

胸腔鏡下食道亜全摘術後の嚥下性肺疾患の発症因子

東邦大学医療センター大森病院　松澤一輝　清水のどか　山村尚裕　谷口尚美

研究の動機は？食道癌術後の患者に対し、食事開始前に嚥下評価を行っています。評価が異常所見という結果でも嚥下性肺疾患を起こさない患者が多数います。そこで食道癌術後特有の嚥下性肺疾患の発症因子があるのではないかと考え研究を開始しました。
この学会を選んだのは？どのように臨床の現場で活かせるか議論できる貴重な機会となると考え、発表の場として最適だと考えからです。

A病院ICU看護師における日常生活動作に合わせたリハビリテーションへの看護介入の意図

東邦大学医療センター佐倉病院　篠原江理子　齋藤日菜子

研究の動機は？ICUで生命の危機にある患者さんに対し、どのようにリハビリを進めて良いか、戸惑う場面が多くありました。ICUの先輩看護師は患者さんのあらゆるタイミングでリハビリ実践を心がけている姿を見て、本研究をしたいと思いました。
この学会を選んだのは？初めての学会発表は不安でしたが、この学会は発表者にとって安心感と温かさがある学会と聞いていました。専門的な知識を持つ方々から直接的なフィードバックを得ることで、研究の深堀りや新たな視点で物事を捉えることが出来ると感じたからです。

免疫チェックポイント阻害薬投与患者における免疫関連有害事象出現時に早期受診行動につながる要因のアンケート調査

東邦大学医療センター大森病院　花形樹梨　滝口広香　大熊正美　崔花連　早野明子　芳澤正子　下地一恵

研究の動機は？免疫チェックポイント阻害薬を投与すると抗がん剤とは異なる全身性の副作用を発症します。下痢等の身近な症状から生命を脅かすまで重症化することを、実際に病棟で経験しました。がん治療を遅らせることなく患者自身が早期から副作用に気付き受診するためには、どのような介入をしたら受診行動につながるかの示唆を得たいと考えました。
この学会の良いところは？病院間で情報共有ができ、新たな事を学べるところが良いと思います。

看護師の経験年数によるサルコペニアおよび医原性サルコペニアに関する知識との関連性

東邦大学医療センター大森病院　古澤圭壱　中西将　田中美奈子　久保孝　森田典子　鷲澤尚宏

研究の動機は？当施設では、院内のプロジェクト活動の一環としてサルコペニアに関する調査と対策を進めてきました。その過程で、医療者の知識がサルコペニアの早期発見や患者の予後に大きな影響を及ぼす可能性があるのではないかと疑問が生じました。現時点での知識レベルや教育ニーズを把握することで、臨床現場におけるサルコペニア対策をさらに充実できると考え本研究を始めました。
この学会の良いところは？実践的な視点と多彩なテーマがあることです。看護の現場を熟知した参加者が多く、研究テーマが実践とどのように結びつくかを具体的に議論できるところが魅力です。

第24回学術集会を終えて
運営委員

第24回学術集会にご参加いただきありがとうございました。運営委員として、緊張しながら当日を迎えました。オンラインの機器操作など院内で練習をしましたが、不手際がありました。そんな時も温かく見守っていただき、ありがとうございました。
学術集会の参加者として、講演や一般演題、日々の取り組み報告を聞き、日頃の看護実践を振り返り「今の私に何ができるんだろう。」と考える機会にもなりました。
皆様のおかげで無事に学術集会が終了いたしました。
ご協力いただき、誠にありがとうございました。

第25回学術集会に向けて
臼井雅美大会長

サイエンスとアートをつむぎ、新たなケアの形を創る（仮）2025年12月13日(土)予定

第25回学術集会は、看護のサイエンスとアートの融合が看護実践に与える影響と創造性と実証性を同時に重視する未来志向のメッセージから、まさに今の時代における看護の本質について探究していきたいと思っております。
皆様、振るってのご参加をよろしくお願いいたします。

運営委員の当日の様子　お疲れ様でした！

入会はこちら

学会への入会お待ちしています！

https://www.n-gakai.toho-u.ac.jp/index.html　広報委員